

学部留学生の論説文における引用の課題

矢野和歌子

要旨

学部留学生の論説文（N1、N2 相当クラス各 9 編、計 18 編）を対象に引用の使用実態についての調査を行った。その結果、形式上の正用率は、N1 クラスの直接引用で 33.3%、間接引用で 45.2%、N2 クラスでは、直接引用がなく、間接引用の正用率は 25.8%と「引用」が留学生にとって大きな課題であることが浮き彫りとなった。

また、N2 クラスで直接引用の使用がなく、間接引用でも注のみで引用であることを示す形式がほとんどであるなど、引用の標識表現の使用が回避されていると考えられ、引用の標識表現の文脈への組み込みが、留学生にとって困難であることが窺えた。課題克服のためには、モデルとなる論文を用い、引用の標識表現を意識化した上でインプットを増やすこと、引用の目的を意識し、文脈へ組み込む練習を課すことの必要性が示唆された。

キーワード

学部留学生、論説文、引用、引用の目的

1. 問題と目的

大学の学部で勉強する留学生には、授業で課せられるレポート（以下、論説文⁽¹⁾）や卒業論文を書く能力が要求される。そうした専門教育内容を含む論説文・論文指導においては、関係する資料や文献から他者の文章を自分の文章にとりこむ作業が必要であり、「引用」のルールを理解し、論の展開の中で「引用」を有効に生かす力をつけることが重要な課題であると考えられる。「引用」には、適切な情報収集力、要約力、視点や表現の調整など、二通（2007）が指摘しているように読解から文章作成に至るさまざまな能力が必要であり、指導の現場でも、「引用の指導が難しい」という声が多く聞かれる。

本研究では、まず、留学生の論説文作成における課題を「引用」の観点から調査し、効果的な指導法について考察したい。

2. 先行研究

日本語の論文における引用に関する研究は、これまで数が少ないが、二通（2007）（2009）、清水（2009）（2010a）（2010b）などがある。

二通（2007）では、アカデミック・ライティングにおける引用の学習内容と、学習過程で明らかになった課題を報告している。また、二通（2009）では、学術論文を対象に、引用の方法の分類と引用の出現位置について調査を行ない、日本語の論文の引用方法や形式の枠組みを示すモデルの試案をまとめている。

清水（2009）では、5 分野の人文系学術論文を比較して、分野により引用文の表現方法に違いがあること、人文系論文では直接引用より間接引用を多く用いる傾向があることを指摘している。清水（2010a）では、人文系学術論文における「～ハ～テイル」引用文の

論文中での使用目的を調査している。清水（2010b）では、学術論文を対象に引用文の文末のテンス・アスペクトに着目し、テイル形文末引用文は当該の論との間に論理性を生み出し、タ形文末引用文は時系列に論を進める際に用いられていることを指摘している。

以上のとおり、これまでの引用表現の使用に関する調査の多くが、学術論文を対象とした調査であり、日本語学習者の引用表現の使用実態や課題についての調査は、二通（2007）以外、ほとんどみられない。本研究では、二通（2007）で指摘された課題を踏まえた上で、定量的な調査も加え、日本語の習得レベル別に、学習者の実態を調査する。

3. 調査

3.1 調査目的

留学生が作成した論説文を対象に、「引用」が適切に行われているかを調査し、留学生の論説文作成における課題を習得レベル別に抽出する。また、引用の目的についての調査を行い、引用が効果的に活用されているか考察する。

3.2 調査方法

学部留学生を対象とした「レポート・論文」の授業で、資料に基づく論説文を作文させた。引用箇所が特定できるように、引用元となる資料は、教師が配布（映像資料は、授業内に視聴）し、それ以外の資料から引用する際は、資料の提出を求めた。引用箇所には番号注を付け、最後に注の番号に対応させる形で、引用文献を提示するよう指導した。引用の課題についての調査は、引用箇所をすべて抽出し、直接引用、間接引用に分けた上で、引用が適切に行われていない事例について、二通（2007）で指摘された学習者の課題を踏まえ分類し、量的に調査した。引用文献の書き方が適切であるかについても、引用が適切に行われているかの課題の一つと捉え調査した。また、引用の目的については、佐渡島・吉野（2008）、清水（2010a）を踏まえ、目的を分類し調査した。

3.3 調査対象

私立大学学部 2・3 年次留学生対象の「レポート・論文」クラスで、卒業論文の練習として作成した論説文 18 編を対象とした。当該クラスでは、オリジナルのテキストを用い、書き言葉の表現、文章の構成、要約、引用を伴うレポートの書き方についての学習を一通り終えた時点で、論説文作成を課した。

N 1 レベルクラス 9 編（中国籍 9 名）

テーマ：「日本社会とストレス」

文字数：2,000 字前後

N 2 レベルクラス 9 編（中国籍 8 名、ウルグアイ籍 1 名）

テーマ：「興味がある二つの企業を比較する」

文字数：1,200～1,500 字前後

3.4 引用の定義

引用の定義について、石黒（2011:294）では、「引用というのは、誰かがすでに話したり書いたりしたことばを、二次的利用であることを明示しつつ、形態・内容ともできるかぎり忠実に再現したもの」と定義づけている。

本研究では、石黒（2011:294）の定義に従い、先行研究に限らず、調査結果、二次的資料などを含め「誰かがすでに話したり書いたりしたことば」を引用元と捉え、調査を行った。また、適切な引用であるか否かの判断をする際、「二次的利用であることを明示」すること、「形態・内容ともできるかぎり忠実に再現したもの」であることを基準とした。

3.5 調査結果①論説文作成における引用の課題

3.5.1 直接引用

直接引用について、表1は、直接引用が適切に行われていない箇所と、不適切だと判定した基準に当てはまる（1箇所の引用につき複数当てはまるものもある）件数をクラス別に示している。表2は、表1の学習者別の内訳を表している。

表1. 直接引用が適切に行われていない箇所

	N1クラス	N2クラス
引用総数（箇所）	9	0
正用	3	0
直接引用が適切に行われていない箇所	6	0
不適切だと判断した基準に当てはまる件数 （合計）＜以下内訳＞	9	0
「」を使用していない	1 (11.1%)	0 (0%)
出典が示されていない	0 (0%)	0 (0%)
引用箇所に適切な表現が伴っていない	5 (55.6%)	0 (0%)
引用箇所と前後の文脈とのつながりが不整合	3 (33.3%)	0 (0%)

表2. 直接引用が適切に行われていないケース＜N1クラス学習者（A～I）別内訳＞

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	合計
引用総数	0	1	0	3	2	1	0	1	1	9
正用（計）	0	1	0	0	0	0	0	1	1	3
直接引用が適切に行われていない箇所（計）	0	0	0	3	2	1	0	0	0	6
不適切だと判断した基準に当てはまる件数（合計） ＜以下内訳＞	0	0	0	5	2	2	0	0	0	9
「」を使用していない	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
出典が示されていない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
引用箇所に適切な表現が伴っていない	0	0	0	3	1	1	0	0	0	5
引用箇所と前後の文脈とのつながりが不整合	0	0	0	2	0	1	0	0	0	3

引用箇所数としては、N1 クラスで、直接引用が 9 箇所あったのに対し、N2 クラスでは、直接引用の使用がないという興味深い結果となった。

N1 クラスの結果では、正用率は 33.3%で、学習者別でみると、直接引用使用者 6 名のうちすべて正用だった者は 3 名であった。適切に使用されていない事例としては、「適切な引用の表現が伴っていない」が、5 箇所 (55.6%)、3 名と目立ち、ついで、「引用箇所と前後の文脈とのつながりが不整合」が 3 箇所 (33.3%)、2 名であった。

3.5.2 間接引用

間接引用について、表 3 は、不適切だと判定した基準（1 箇所の引用につき複数当てはまるものもある）ごとの件数をクラス別に示している。表 4 は、N1 クラス、表 5 は N2 クラスの学習者別の内訳を表している。

表 3. 間接引用が適切に行われていない箇所

	N1 クラス	N2 クラス
引用総数 (箇所)	42	31
正用	19	8
間接引用が適切に行われていない箇所	23	23
不適切だと判断した基準に当てはまる件数 (合計) <以下内訳>		
出典が示されていない	7 (24.1%)	10 (33.3%)
要約がうまくできていない	4 (13.8%)	10 (33.3%)
要約部分のダイクシスの調整が行われていない	1 (3.4%)	2 (6.7%)
引用表現を伴うべき文脈で適切な表現が伴っていない	6 (20.7%)	0 (0%)
引用部分と前後の文脈とのつながりが不整合	11 (37.9%)	8 (26.7%)

表 4. 間接引用が適切に行われていないケース < N1 クラス学習者 (A~I) 別内訳 >

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	合計
引用総数	4	3	4	4	1	4	8	8	6	42
正用 (計)	2	2	1	1	0	4	3	2	4	19
間接引用が適切に行われていない箇所 (計)	2	1	3	3	1	0	5	6	2	23
不適切だと判断した基準に当てはまる件数 (合計) <以下内訳>										
出典が示されていない	0	0	0	0	0	0	3	3	1	7
要約がうまくできていない	0	0	2	1	0	0	0	1	0	4
要約部分のダイクシスの調整が行われていない	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
引用表現を伴うべき文脈で表現が伴っていない	1	0	1	2	0	0	1	1	0	6
引用箇所と前後の文脈とのつながりが不整合	1	1	1	1	1	0	3	1	2	11

表 5. 間接引用が適切に行われていないケース < N2 クラス学習者 (A~I) 別内訳 >

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	合計
使用箇所総数	4	5	4	2	1	4	3	3	5	31
正用 (計)	0	1	3	0	0	0	2	0	2	8
適切に行われていない箇所 (計)	4	4	1	2	1	4	1	3	3	23
不適切だと判断した基準に当てはまる件数 (合計)	7	4	1	3	2	4	1	4	4	30
< 以下内訳 >										
出典が示されていない	3	2	0	2	1	0	0	2	0	10
要約がうまくできていない	2	1	1	0	0	1	1	2	2	10
要約部分のダイクシスの調整が行われていない	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2
引用表現を伴うべき文脈で表現が伴っていない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
引用箇所と前後の文脈とのつながりが不整合	1	0	0	1	1	3	0	0	2	8

引用箇所数は、N1 クラスが 42 箇所、N2 クラスが 31 箇所であった。そのうち、正用は、N1 クラスが、19 箇所で 45.2%、すべて正用だった者は 1 名、N2 クラスは、8 箇所で 25.8%、すべて正用であった者はいなかった。

N2 クラスでは、「出典が示されていない」、「要約がうまくできていない」がいずれも 33.3%、該当者は、それぞれ、5 名、7 名と目立つ。また、両クラスに共通して「引用部分と前後の文脈とのつながりが不整合」な箇所が、N1、37.9%、N2、26.7%と多い。

N2 クラスで、「要約がうまくできていない」箇所については、引用元の原文をほぼそのままコピーするようなケースが目立つ。

また、「要約部分のダイクシスの調整が行われていない」例としては、以下のようなものがある。

例 1 (N2 クラス論説文 2 「アップル VS サムソンについて」より原文の一部)

また、OS を比較すると、アップルのシステム ios とサムソンの Andrioid が拮抗しており、ios が 49.2% を占め、Andrioid が 45.8% を占め、iphone がややな優勢である。でも、Andrioid 携帯にも勢いがあり、⁽³⁾世界主要都市で前年同時期よりもシェアが拡大している。(注：波線部分が間接引用。筆者が付した)

上記例 1 では、引用元の原文のまま「前年同時期」という表現が使われており、この引用箇所が示す調査が行われた時期に関して、前後の文脈にも記載がないことから、「前年同時期」がいつなのか不明である。

ダイクシスの種類には、人称ダイクシス、場所ダイクシス、時間ダイクシス、ソーシャルダイクシスなどがある (鎌田 2000:95-97) が、本調査では、例 1 のように時間ダイクシスの表現が調整できていないケースがすべてであった。

また、ダイクシスの表現の調整については、適切に行われていない箇所の数で見ると 3 箇所と少ないが、ダイクシス表現の調整が必要な箇所自体が全 3 箇所ので、そのすべてで、調整が適切に行われていないという点にも着目すべきだといえる。

3.5.3 引用文献の提示

表 6 は、引用文献が適切に提示されているかについての調査結果を示している。

表 6. 引用文献が適切に提示できていない論説文

	N1 クラス (9 編中)	N2 クラス (9 編中)
引用文献が適切に提示できていない	3 (33.3%)	7 (77.8%)

「引用文献が適切に提示できていない」ケースとしては、N2 クラスで、記載が全くないケースが 1 件、HP アドレス、HP 名、アクセス日時のいずれかの記載が欠け、参照元の正確な特定ができないものが 6 件あった。

3.6 調査結果②引用の目的

引用の目的については、佐渡島・吉野 (2008) の分類を元に、清水 (2010a) で付け加えられた「先行研究の提示」と、本研究で新たに、「定義の説明」、「社会的実情や歴史的経緯」の提示を加え、8 項目に分類した。

次の表 7 は、N1 クラス、N2 クラス別の引用の目的についての調査結果を示している。

表 7. 引用の目的

引用の目的	N1 クラス	N2 クラス
①個別の事例や具体的内容を提示する	2 (3.9%)	21 (67.7%)
②定義の説明を提示する	6 (11.8%)	1 (3.2%)
③社会的実情や歴史的経緯を提示する	17 (33.3%)	9 (29.0%)
④解釈を示す	7 (13.7%)	0 (0%)
⑤別の視点を提示する	0 (0%)	0 (0%)
⑥論点を分析するための観点を提示する	0 (0%)	0 (0%)
⑦自分の主張を支持する意見や、根拠となるデータを提示する	1 (2.0%)	0 (0%)
⑧自分の主張と異なる意見を提示し、自分の意見を際立たせる	0 (0%)	0 (0%)
①と③の複合型	18 (35.3%)	0 (0%)
合計	51 (100%)	31 (100%)

特徴としては、まず、N1 クラスでは、③の「社会的実情や歴史的経緯を提示する」目的での使用が 33.3%、①と③の複合型が 35.3%と多く、下位クラスでは、①の「個別の事例や具体的内容を提示する」目的での使用が 67.7%と非常に多いことが挙げられる。また、N1 クラスでは、②の「定義の説明を提示する」目的での使用が 11.8%と比較的多い。これらの目的でのクラス別使用頻度の違いは、N1 クラスが「日本社会とストレス」、N2 クラスが「興味がある二つの企業を比較する」というテーマの違いによるところが大きいと

考えられるが、N1 クラスの論説文の序論において、読み手にわかりやすく、背景や用語の説明をしようとする姿勢があることも影響していると考えられる。

効果的に引用を活用できているかという視点でみると、N1 クラスの論説文のいくつかでは、N2 クラスでは使用がない④「解釈を示す」、⑦「自分の主張を支持する意見や、根拠となるデータを提示する」目的で引用を活用することによって、比較的説得力のある論旨展開になっているといえる。

全体的には、N1 クラス、N2 クラス共、引用の使用の目的のほとんどが事実関係の整理に限られており、「別の視点の提示」や「自分の主張」の補強での使用がほとんどなく、引用の目的が限られている。

3.7 考察

「引用」について、形式上の正用は、N1 クラスの直接引用で 33.3%、間接引用で 45.2%と、N1 クラスでも 5 割に満たず、N2 クラスでは、わずか 25.8%であり、論説文作成における「引用」が留学生にとって大きな課題であることが浮き彫りとなった。

また、N2 クラスで直接引用の使用がなく、間接引用でも、注のみで引用であることを示す形式がほとんどであるなど、引用の標識表現の使用が回避されていると考えられること、N1 クラスでも間接引用のほうが直接引用より正用率が高いことから、直接引用に伴う標識表現の提示や文脈への組み込みが、留学生にとって困難であることが窺える。

クラス別の特徴としては、N2 クラスについて、形式上の誤りが目立つこと、また、限られた目的でしか引用を活用できていないことで、考察が浅く、自明な内容の説明に終始してしまう傾向が指摘できる。

N2 クラスの課題として、指導の観点からは、まず、引用を含む文章を多く読み、関連表現のインプットを増やすことが必要であると考えられる。同時に、「出典を示す」、正確に「引用文献を記載する」など、基本的な形式にフォーカスし、明示することが必要であろう。また、直接引用を回避する傾向については、定義の提示の際など、直接引用の使用が効果的な文脈で、適切に使用できるように練習する必要があると考えられる。

N1 クラスでは、N2 クラスに比べ、引用のルールについては理解し、要約もできているが、両クラスに共通して、「引用箇所適切な表現が伴っていない」、「引用箇所と前後の文脈とのつながりが不整合である」といった引用を文脈の中へ組み込む際の課題があることが明らかになった。

両クラスに共通した課題への取り組みとしては、従来からテキストで多く扱われている「～によると・・・という」といった文単位で切り取られた例文の提示にとどまらず、モデルとなる論文を多く読むことで、文脈の中で関連表現のインプットを意識化すること、さらに、引用した情報をどう論旨展開に利用するかを意識した上で、文脈に組み込む練習が必要であると考えられる。

4. おわりに

本研究では、学部留学生にとって、「引用」の標識表現の使用や文脈への組み込みが困難であること、「引用」を文章展開の中で十分に活用できていない実情が明らかになった。これらの実情を踏まえ、等身大のモデルとなる論文の提示や、文脈への組み込みなどにつ

いてきめ細かな練習を提供する必要性が示唆された。今後、学部留学生の身近なモデルとなる優秀卒業論文について、引用文を含むディスコース展開についての調査を進め、モデルとなる論文を収集したい。

(矢野和歌子 やのわかこ・公益社団法人 国際日本語普及協会)

注

1. 大学の授業で課せられるレポートでは、ある主題について、資料・文献を調べた上で、問題点などを論じ、考察を述べることが多いことから、二通・佐藤 (2003:88) に従い、本稿では、論説文と呼ぶ。

付記

本稿は、2014年1月に提出した修士論文「引用に着目した人文社会学系優秀卒業論文の分析—卒業論文作成支援における引用の効果的指導をめざして—」の第三章 予備調査の内容を土台に、加筆修正し、まとめたものである。

参考文献

- 石黒圭 (2011) 「引用の種類と作法」 中村明・佐久間まゆみ・高崎みどり・十重田裕一・半沢幹一・宗像和重(編)『日本語文章・文体・表現事典』朝倉書店
- 鎌田修 (2000)『日本語の引用』ひつじ書房
- 佐渡島沙織・吉野亜矢子(2008)『これから研究を書くひとのためのガイドブック』ひつじ書房
- 清水まさ子 (2009) 「異なる専門分野における引用文の表現方法：5種類の人文系論文を比較して」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第15号, pp. 1-11
- 清水まさ子 (2010a) 「～ハ～テイル引用文の論文中での使用目的」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』vol. II, pp. 90-100, アカデミック・ジャパニーズ・グループ
- 清水まさ子 (2010b) 「先行研究を引用する際の引用文の文末表現—テンス・アスペクト的な観点からの一考察—」『日本語教育』147, pp. 52-66, 日本語教育学会
- 二通信子 (2007) 「外からの情報を自分の文章にどう組み込んでいくか—アカデミック・ライティングにおける引用の学習—」『2007年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp. 283-284, 日本語教育学会
- 二通信子 (2009) 「論文の引用に関する基礎調査と引用モデルの試案」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』vo. I, pp. 65-74, アカデミック・ジャパニーズ・グループ
- 二通信子・佐藤不二子(2003)『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク